

# グローバルにいがた



## from ロンドン

和子 ギブソンさん

＝妙高市出身＝



自宅の庭で『友』を着て記念撮影

1995年にロンドンに来て以来、25年がたちました。1年の留学のつもりだったのが、第2の故郷になるとは想像もしていませんでした。

90年代半ばのロンドンでは「日本食は生魚ばかりだから食べられない」とか、日傘を差していたら「晴れているのに傘なんか差すと本当に雨が降る」と言われまして。

しかし、状況は大きく変わりました。「Japanは「Country」との発音が大きくなり、若者は日本食が大好き。アニメやマンガ、Jポップなどで日本文化に触れ、日本語を習い始めた人もたくさんいます。

そんな中、私はあるとき着物の素晴らしさに目覚め、機会があれば着物を着て出掛けています。日本にいたころは母が買ってくれた高価な着物や帯に全く興味がなく、成人式とお茶会で着た程度。そしてそれらのほとんどは1995年に起きた関川の洪水被害で、実家とともに流されてしまいました。

## 着物で外出 待ち望む

残ったのは、当時東京にいた私がつけていた着物2組だけ。それを着ようと思いましたが、長くロンドンに住むうちに自分のアイデンティティに気付いたからです。パンよりご飯と納豆がおいしい。カタカナ言葉より日本語が美しい。ああ、私はやっぱり日本人だとしみじみ思うのです。

着物はドレスよりずっと似合うことに気付きました。着物を着ると姿勢が正され、気持ちも引き締まります。人種の混在するロンドンで、なんだか日本を代表しているような責任感と誇りの気持ちまで湧いてくるのです。

着物を着ていると必ずと言っていいほど「写真を撮らせて」と言われます。街中やパーティーでちょっとしたスター気分になります(自意識過剰かな?)。

伝統にとられない前衛的な着こなしができるのも、ロンドンにいてこそ。今や20着ほどに増えた着物は、英語圏で生活する私に日本の心思い出させてくれる大切な友なのです。

最近では新型コロナウイルスのせいで着物を着る機会がないのが残念です。今は世界中が心を合わせてこの未曾有の危機を乗り越え、1日も早く元の平和な日々に戻れるよう願ってやみません。

(和子ギブソンさんは1995年3年生まれ。旧妙高高原町出身の日本語教師です)

## from NY

鈴木 麻莉子さん

＝新潟市出身＝



人の姿が消えたニューヨークの地下鉄の駅。人々は一日も早い終息を願っている

新型コロナウイルスの感染拡大防止のための自粛生活を始めて、かれこれ2カ月がたとうとしています。

自粛の要請が出る前から、自主的に在宅ワークを始めていた私は、ほとんどの時間を自宅で過ごしています。

2カ月という時間は、生活や身体、価値観を委ねるには十分な時間です。

異様に感じていた完全防備の店員やマスク姿の人々、空っぽのビル、コロナウイルスのため休業と書かれた店先の手作りポスターも、いつの間にか日常の風景となっていました。

そんな楽しい日々が新型コロナウイルスで一変、中国をはじめ米国や欧州など世界各国が大混乱となり、日本でも緊急事態

## 声援送り合い 励みに

汗を流す移民たち。ずっと動き続けることが美しいことかのように、この街は夜になっても眠ることなくキラキラと輝いて見えました。

私は街に出て人々の写真を撮る仕事をしていたので、家にいる時間が増えると、自分がいかに外の世界と関わりながら生きてきたのか、日々いろいろな人や出来事、風景に出会いながら生きてきたのか、生かされてきたのかということをとっても強く感じるのです。

少しアンニュイな気持ちになりがちの日々ですが、毎日午後7時になると、窓から歓声や声援、楽器を鳴らす音が聞こえてきます。

ニューヨークでは、医療関係者やエッセンシャルワーカーに向けて声援を送り合うムーブメントがあちこちで起こっています。

静けさに包まれていた街も、その瞬間だけはニューヨークらしい優しさや強さを取り戻すのです。

## 国際交流拠点から



第1月曜掲載

新潟日报社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をレポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。

## from 大連



皆川 建二さん

＝見附市出身＝



歴史を感じる古い建物と近代的なビルが建ち並ぶ中山広場。大連市街の中心地にある

私が赴任している大連市は、中国東北地域、遼東半島の南端に位置しています。三方を海で囲まれた、歴史的に日本と関係が深く、気候が穏やかで風光明媚な街です。新鮮な食材が豊富で、料理もおいしいです。

## 早期終息 街に活気を

そんな大連へ私が赴任したののは3回目。最初に赴任したのは1994年、96年だった。当時の大連は、全くとく世界で近代化が進み、電車や地下鉄のアンナンスも以前は中国語と英語だけでしたが、今は日本語や韓国語でもアンナンスが流れるようになったように感じられるのがとても嬉しいです。

私の休日の過ごし方は、趣味の写真を撮る。古い街並みと新しい街並みが融合している大連市内や、春になるときれいに咲いた桜や新緑の風景を写真に取るため、カメラを持って散歩に出掛け、街角の風景などいろいろな写真を撮って楽しんでいます。

そんな楽しい日々が新型コロナウイルスで一変、中国をはじめ米国や欧州など世界各国が大混乱となり、日本でも緊急事態

「降りやまない雨はない」という言葉がありますが、喉元過ぎれば熱さを忘れることなく、全世界が協力し合ってこの危機を乗り越えることで、新型コロナウイルスが終息し、にぎやかな繁華街、活気ある大連が戻ることを願っています。まだまだ大変な日々が続くと思いますが、みなさんも健康に留意され、一緒に闘っていきましょう。

(皆川さんは1960年、見附市生まれ。シフト測定の社員として大連で働いています)

# 家にいよう。

新潟日報を読もう。



わたしたちがお届けしています。  
NIC新潟日報販売店グループ  
新潟市中央区万代3-1-1 新潟日報社読者局販売部内  
TEL.025-385-7411(土日祝除く10:00~17:00)

スタッフの手洗い、うがいの励行など万全の体制で新聞をお届けします。

外に出ないけど  
外のことに詳しくなった。